

知識国家の構想

「知識国家論序説 新たな政策過程のパラダイム」より

一橋大学大学院 国際企業戦略研究科 教授

野中郁次郎

国家における知識とは

■ 知の性質

- 全人的なものである（心身性）
- コンテクストに依存し、ダイナミックに構成される（動的関係性）
- 多視点から真理に近づく能力（寛容性）

■ 知の定義

個人の信念やスキルを『真理』に向かって正当化していくダイナミックで人間的／社会的なプロセス

■ 知識国家論の命題

政策過程は知識創造過程である

真理の追求

■ 真理条件

- 対応説 (Correspondence)
- 整合説 (Coherence)
- 行為結果説 (Pragmatism)
 - 絶えず変わる真理基準
 - 実験的な知の構築モデル
 - 真・善・美といった理想を組み込む

理想主義的プラグマティズム

■ 知的方法論

普遍的・絶対的知識を求めつつも、
現実の対立項の中で矛盾を革新的
に止揚しつつリアリティに迫る

■ 価値の追求

「どのような社会を創りたいのか」

知の綜合力 (Synthesizing Capability)

■知識国家とは

対立する概念ないし命題を革新的に組み合わせ、すなわち**弁証法的に「綜合」**して、より大きな、次元の高い知識を生み出していく政策過程を実現する国家

知識創造：暗黙知・形式知のスパイラル

暗黙知 (Tacit Knowledge)

言語・文章で表現するのが難しい
主観的・身体的な知

高コンテキスト依存度
(いま・ここ)

経験の反覆で体化される思考
(思い・メンタル・モデル)や技能
(熟練・ノウハウ)

形式知 (Explicit Knowledge)

言語・文章で表現できる
客観的・理性的な知

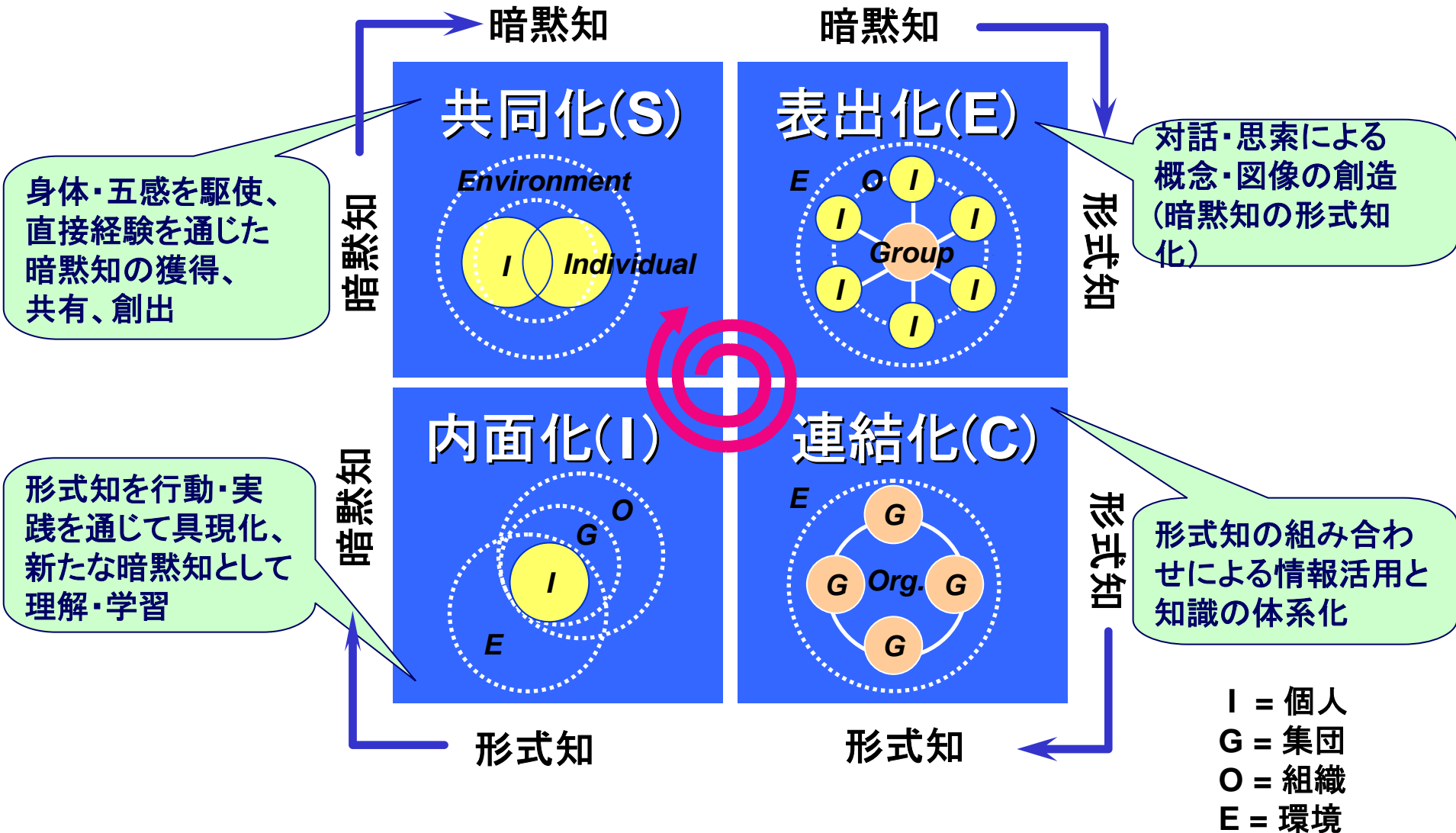
低コンテキスト依存度
(あそこ・あの時)

普遍的な概念や論理
(理論・問題解決手法・マニュアル・
データベース)

相互作用

アナログ知ーデジタル知の動的総合

SECIモデル



身体・五感を駆使、
直接経験を通じた
暗黙知の獲得、
共有、創出

形式知を行動・実
践を通じて具現化、
新たな暗黙知として
理解・学習

対話・思索による
概念・図像の創造
(暗黙知の形式知
化)

形式知の組み合わ
せによる情報活用と
知識の体系化

- I = 個人
- G = 集団
- O = 組織
- E = 環境

弁証法 (Dialectic)

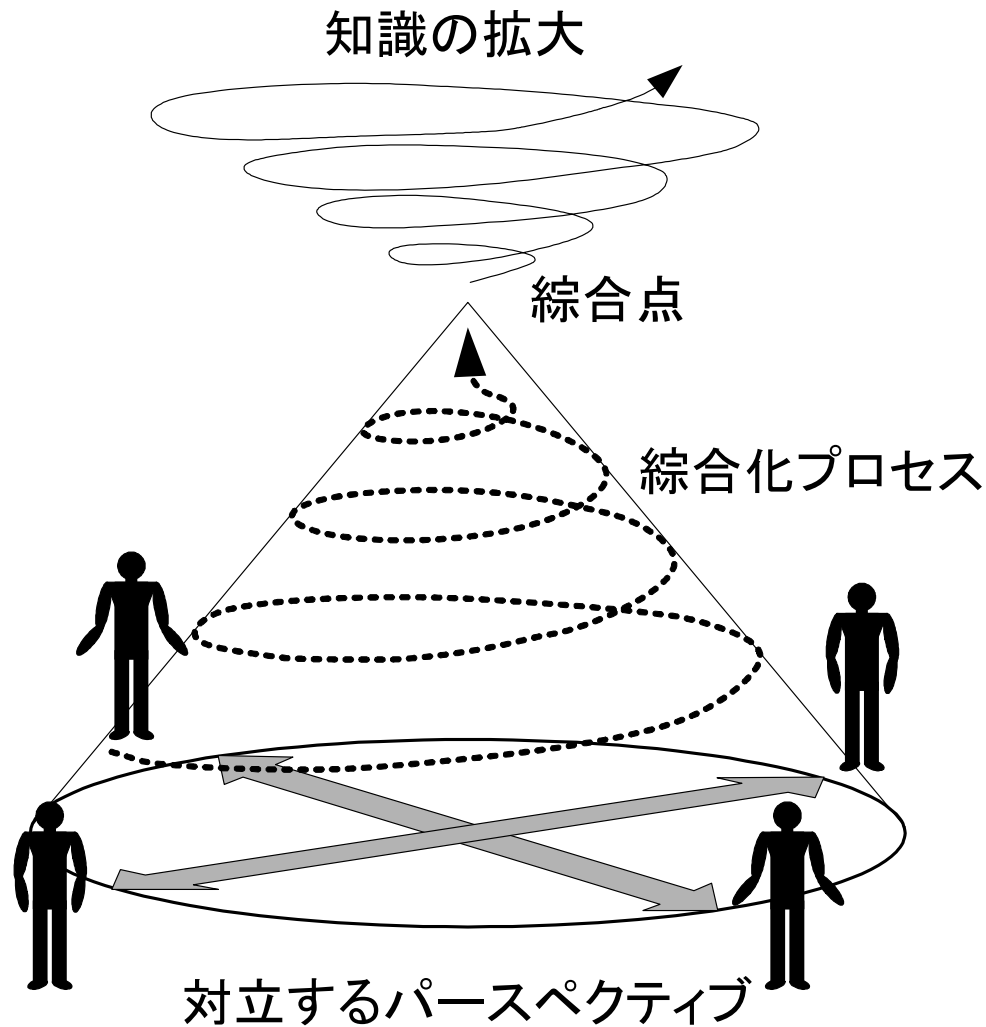
■ 対立の受容と解消 (Embrace & Cultivate)

- 価値の対立を許容し、そこから新たな意味を生み出し続ける
- 合意形成には「現実直視」、「知的謙虚」、「臨機応変」、「執拗性」が要請される

■ 弁証法とは

- 対立と総合を繰り返し発展的に真理に迫るプロセス
- 万物は連続的に発展と生成の中にある

総合の円錐モデル



場：ダイナミックな文脈共有 (Shared Context-in-Motion)

知はダイナミックな文脈(時間・場所・人との関係性)のなかで立ち現れてくる。つまり、特定の時間・空間における人との相互作用(身振り、話法、行為、雰囲気)のなかで可視化されてくる。

場とは相互作用を通じて他者と文脈を共有し、その文脈を変化させることにより意味を創出する時空間である。

- 物理的場 — 職場 (work place)
- 仮想的場 — 電子メール、TV会議
- 実存的場 — プロジェクト・チーム

のどれでもありうる。

「よい場」の条件

- 意図・方向性・使命を持つ自己組織化された時空間（誘導的自己組織性）
- 開かれた境界（浸透可能性）
- 多様な背景、視点を持つものとの創造的対話（dialectical dialogue）
- 時間・空間のみならず、自己をも超越する組合せ（dialectical configuration）

知識国家への展開

1. 知識ビジョン

- 日本の存在理由と理想社会への絶対価値の追求、例えば
- アングロサクソン型資本主義、ヨーロッパ型資本主義、アジア基軸の第三の道
- 「科学技術立国」、「ソフトとハードを融合したものづくり国家」
- 「日本伝統に根ざす文化国家」
- 「個と集団を両立させる教育国家」
- 「知識基盤安全保障国家」
- 「環境立国」、「観光立国」...

2. 知識資産 (knowledge assets)

- 国家ブランディング
- 「知的財産」の創造・活用
- 人民の「知徳」(福沢諭吉)
- 社会関係資本(social capital): 愛・気配り・信頼・安心感
- 正当化費用(justification cost)の削減

知識国家への展開

3. 重層的な政策形成の「場」

- 中央政府:産官学超境界の相互作用の場、「霞が関」の知識経営
- 自治体行政:知の生産性を高める自治体の知識経営
- 「知的クラスター創生事業」、「産業クラスター計画」
- 政策プラットフォームと情報技術化(知識経営支援システム)

4. インセンティブ・システム

- 「個」を生かす教育システム
- 内因的モチベーション
(夢・達成感、「郷土や国を愛する心の涵養」)
- 外因的モチベーション(報酬体系のあり方)
- 社会的知識媒体の評価システム(とりわけマスコミの質)

知識国家への展開

5. クリエイティブ・ルーティン

- 個人、組織、社会が持っている思考・行動様式のエッセンス
- 真善美の無限の自己革新プロセスが組み込まれている実践的な日本の「型」概念の再評価
- 「民主主義」の型
高い質のルーティンに総合される必要がある

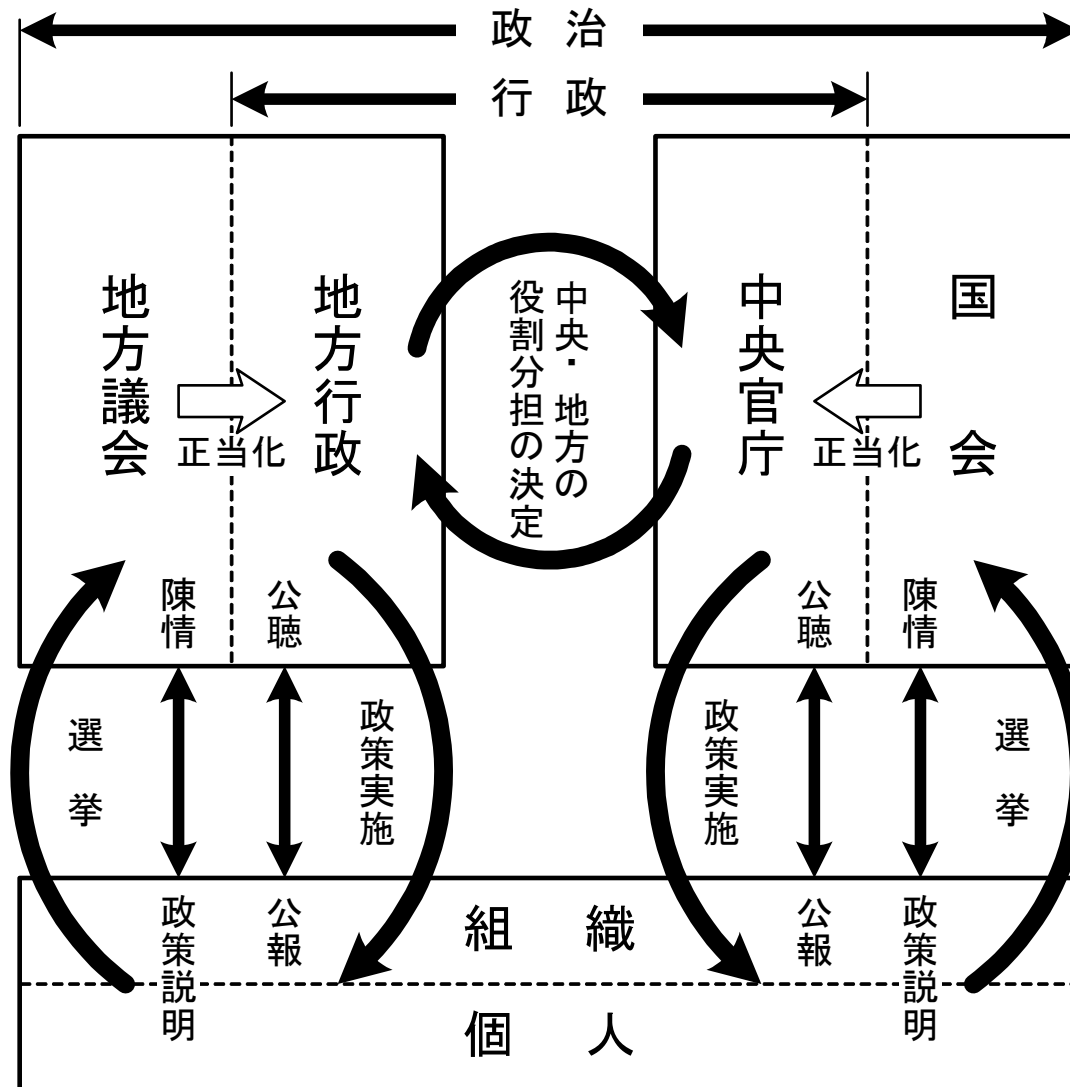
6. 自律分散型リーダーシップ

- プロフェッショナルなチームによるリーダーシップの追求
- 臨機応変で固定化されない
- 即興を演じて、状況を変化させ、矛盾を克服していく
- 正統性 (legitimacy) の確保

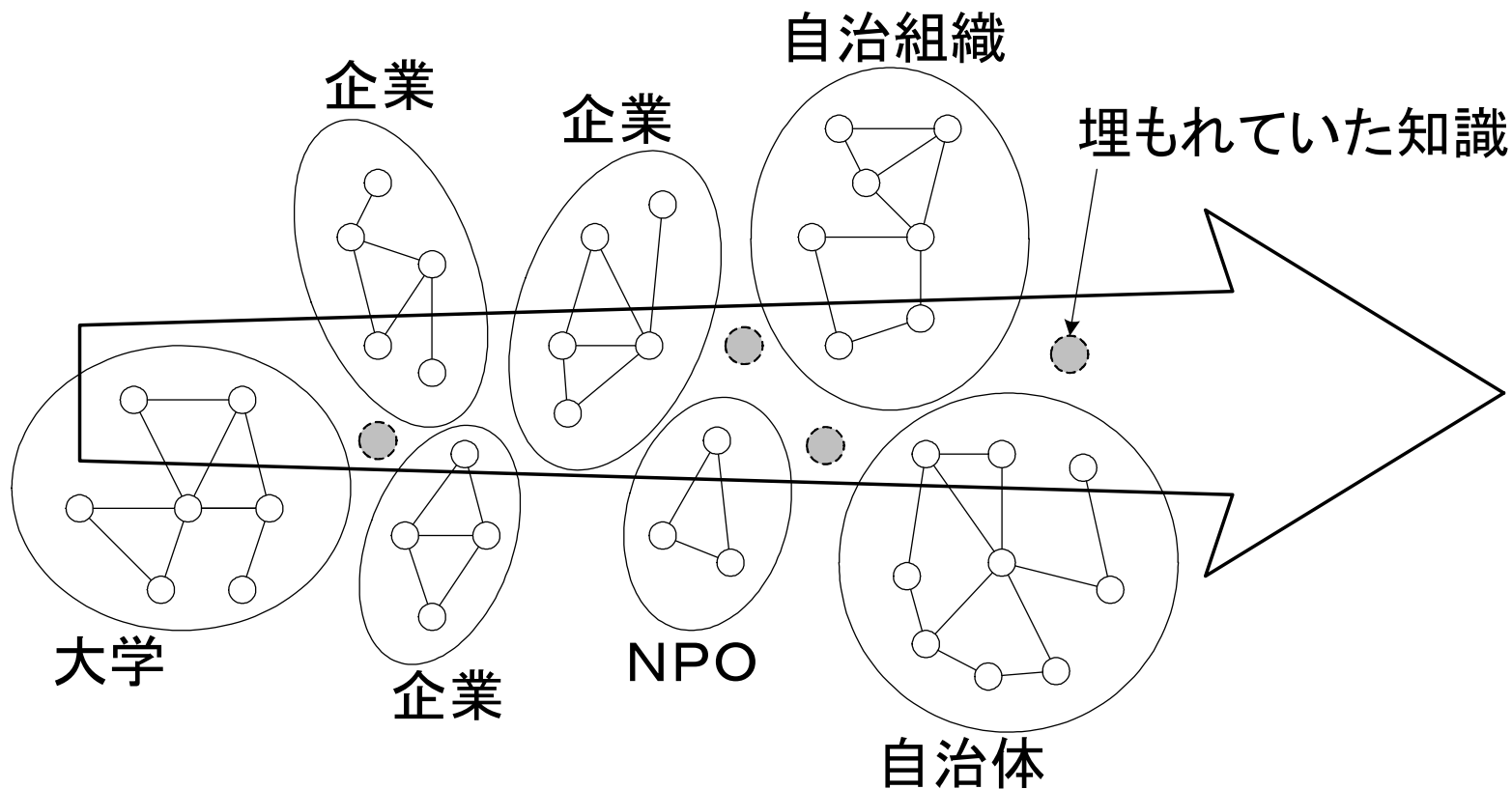
7. 知識基盤外交安全保障システム

- 「平和」概念の深耕
- 「情報RMA」、RMA= Knowledge-based Warfareへの変革

中央政府を分析単位とした「場」の相互作用



地域を分析単位とした 知のクラスター



「知識国家論序説」の構成

第1章 知識国家の構想

第I部 政策形成プロセスの新潮流

第2章 政府の機能と情報化による知識創造の場の拡大 補論 匿名掲示板の動向

第3章 ポスト開発主義の政策決定と社会的知識マネジメント

第II部 組織革新からの示唆

第4章 組織を超えた知識創造と政策形成 —オープン・コラボレーション

第5章 ナレッジ・ダイナミクスが発見 —パブリック・セクターの組織革新への示唆

第6章 戦略環境の変化と軍事組織の対応 —軍事における革命(RMA)と組織的知識創造

第III部 合意形成プロセスの実証研究

第7章 NPO法成立過程 —改訂・政策の窓モデルによる分析

第8章 社会的合意形成における複雑性の縮減メカニズム —原子力発電をめぐる信頼と社会システム観の分析

「知識国家論序説 新たな政策過程のパラダイム」

野中郁次郎・泉田裕彦・永田晃也 編著、2003年、東洋経済新報社

今後の課題

■「序説」から「論」へ

- 知識国家のフレームワークを提示
世界システム、経済システム、社会システムとの融合
- 知識国家の価値意識の生成過程の研究

■「理想主義的」から「普遍的」へ

国家レベルから自治体レベルまで具体的な事例で検証を重ねる